西南学院大学　国際文化論集　第37巻　第２号　107－122頁　2023年３月

安岡章太郎の文学における日本近代化への批判

宋　　婷*

はじめに

「近代化」という日本語は英語の「modernization」から来ている言葉である。この「modernization」は英語の「modern」という形容詞から派生した言葉であり，西洋学界において，「modern」の定義は様々であるが，一般的には紀元1500年頃から今現在までの時間帯を指し，「modern times」[1)]とも言われている。

「modernization」の日本語訳の「近代化」には「化」という接尾辞がつき，その前の語句の「近代」の状態を示す。言い換えれば，「近代」という状態の変化の過程を表す。大辞林の解釈によれば，日本語の「近代」には二つの意味がある。１．近頃の世。この頃。現代。２．歴史の時代区分の一。西洋史では，ルネサンス，大航海，宗教改革以降の時代，特に市民社会と資本主義を特徴とする時代をいう。日本史では一般に，明治維新から太平洋戦争終了までの時期をいう。また，それ以降を現代というが，一九一七年のロシア革命以後を現代，それ以前を近代とする考え方[2)]もある。つまり，比較的広い意味を持っている言葉である。

周知のように，日本の近代化の幕開けは1868年の明治維新だとされている。19世紀60年代，日本の徳川幕府と各地の藩による政治体制が崩壊し，明治新政

＊吉林大学

1) 西洋では，「modern times」の開始時間に関しては，学界の観点は統一しておらず，1450 年前後と考える学者もいる。終了時間に関しては，今現在もその範囲に属しており，私たちが今生きている時代に最も近い歴史的段階を「modern times」に入れる学者もいる。

2) 松村明，『大辞林（第４版）』，三省堂，2019：745．

府は天皇を中心とする中央集権国家を建設した。いわゆる廃藩置県を経て，日本国内の政治的統一が完成し，日本は近代化社会に入った。

日本は西洋各国以外の国の中で，もっとも早く現代化を実現させた国である。これは世界史上において一つの成功例であり，また一つの例外でもある。中国の学者の羅氏が語ったように，日本の近代化は「内部からの脱落という過程を得ず，僅かに縁辺化しただけで，とうとう漸進の改革を通し，工業化を実現させた。また，それにより，目覚ましいスピードで東アジアの新しい中心になった。」[3]しかし，この「目覚ましいスピードで東アジアの新しい中心になった」のは経済の角度からの考え方で，政治，文化及び社会面などの要素が無視されているのである。この日本の近代化の不完全性をめぐっては今まで多くの研究者あるいは学者たちは自分の意見を述べた。例えば，日本近代文学の双璧の一人と呼ばれる夏目漱石は日本の近代化を「外発的開化」であり，「皮相上滑り」だと批判したことがある。

そのほかにも日本の近代化が進んでいる中，その中に潜んでいる危険性に気づき，発声した文学家も少なくなかった。その代表者の一人として第三の新人の旗手である安岡章太郎があげられる。安岡章太郎は1920年に日本の高知市に生まれ，2013年に93歳で死去した。安岡の父は陸軍獣医官だったため，安岡は生後２ヶ月から家族とともに住むところを転々とした。1944年に，24歳の安岡は慶應義塾大学在学中に召集を受け，満州に赴いたが，翌年肺結核にかかったため，日本に送還された。戦後，彼は貧乏と病気の中で文学創作をはじめ，1953年に『陰気な愉しみ』『悪い仲間』の二作で芥川賞を受賞し，戦後文学の転回点を示す「第三の新人」の旗手と呼ばれていた。

安岡は戦中や戦後の普通の人々の日常生活を常に弱者の視点から見つめ，私小説風に語っていた。それゆえ，彼の書いた文学作品は思想性や批判性に乏しいと指摘されたことがしばしばある。ところが，筆者の考えでは，彼は一般の人々を描くことによって，当時の日本社会や教育及び体制などに反抗し，特に，

---

3) 罗荣渠，『现代化新论：世界与中国的现代化进程』，商务印书馆，2004：455-456.（筆者訳）

近代化が日本の社会全体，各家族及び一般の人々に及ぼす影響を文学作品によって書き記し，自分の意見や主張を顕にしたのである。本稿は主に安岡の『セメント時代の思想』や「志賀直哉私論」「私説聊斎志異」などの代表作を研究対象に，安岡の文学に見られる，日本の近代化への批判を考察する。

1．近代化が日本社会に与えた影響

1973年，安岡章太郎の書いた随筆集『セメント時代の思想』が出版された。その中に44編の随筆が収録されている。タイトルにある「セメント」は無機質接着剤の総称で，主に土木建築用のポルトランドセメントのことを指している。テクストの中にも書いてあるように，安岡がセメントに興味を持ち始めたのは彼がキリスト教会に行った経験に由来している。安岡は偶然の機会で，ある教会に入り，その中で，もっとも彼の注目を惹きつけたのはその建築物の材料としてのセメントである。彼にとって，教会の建物そのものは立派に見えるが，そのセメントで作られている天井は非常に圧迫感を感じさせた存在である。

> （前略）セメントという材料の何か“近代”思潮に通じ合うところから生じてくるように思われる。
>
> 技術は，それをつくり上げるまでに大変な努力と時間と才能とを要するが，いったん出来上がってしまうと誰でもが容易にそれを用いることができるという。そういう技術思想と同じものがセメントという材料の中に，そのまま含まれていそうに思われる。実際セメントぐらい便利に出来上がっているものはないだろう。形をとって流しこみ，かたまりさえすれば，それでどんな格好のものでも出来上る。（中略）
>
> しかし，どんな格好でもなるセメントは，それ自体の性格を素材として生かしながら何かをつくろうとなると，これは怖ろしく扱いにくいものにちがいない。[4)]

4) 安岡章太郎，『セメント時代の思想』，講談社，1972：14．

セメントは便利で，どんな格好のものにでもすぐに作れる。しかし，反対に，それ自体の性格や素質はすべて失ってしまう。それはまさに日本が西洋各国と同じような近代化を実現させるために，自国固有の伝統と自国なりの特性を無視するのと似ていると安岡は主張しているのである。つまり，一目瞭然，この小説の中の「セメント」というものは近代化のことを暗示し，また，セメント時代は安岡の生きている，近代化しつつある日本社会のことを暗喩していることと理解してよかろう。

『セメント時代の思想』の中で，安岡は日本が近代化を実現した後の軍隊や教育などの諸問題にも言及した。

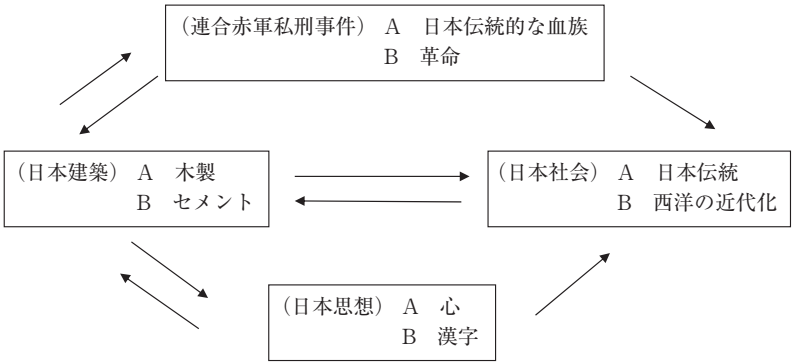
> 無論，日本軍は兵器も作戦用兵も世界の先進国を目標にし肩を並べようとしていた。とくに海軍は英米の最先進工業国と軍備を争っていたことはよく知られている通りだが，軍陸だって装備の機械化・近代化を陸軍なりに懸命に進めていたことはいた。要するに軍隊は，陸海空軍を問わず，人間の集団を近代的なメカニズムに合わせて組織し機能を果たさせることを目的にしている。だから兵隊の教育は，結果だけを重視した一夜漬けのツメコミ教育が行われる。たとえば大砲の照準には高等数学が必要であれば，砲兵は数学の理論とは無関係に公式と答の出し方だけを無二無三にマル暗記させられる。── これは連合赤軍のメンバーの大半が，横浜国大その他，優秀な大学に入るために，おそらく子供の頃からやらされてきた受験勉強と，どんなに良く似ていることだろう。余談であるが，総括されたメンバーの一人は私の卒業した青南小学校の後輩であり，それは昔から東京でも名だたる猛烈な受験教育の学校だった ──。こうした功利主義的な教育のおかげで，日本兵は近代兵器の生きた機械部品のように一人々々が徹底的に叩き上げられた。しかも，その一人々々の精神内容は一と口にいって，封建時代の地主のもとで働いていた小作農のそれとほとんど変わりなかったのである。[5)]

---

5) 安岡章太郎，『セメント時代の思想』，講談社，1972：23-24．

安岡からすれば，日本の血に流れているものは容易に変わることのできない封建的で伝統的な思想である。一方，速いスピードで世界の先進国の物真似をし，肩を並べようとしている日本はその内部の思想と外部からの影響が食い違っており，形式だけを重視する理念が圧倒的に多かった。日本の軍隊の詰め込み教育や学校の受験教育は全てその産物と言えよう。さらに，安岡は「連合赤軍」や「思想と漢字」などの例も列挙した。

『セメント時代の思想』全編において，安岡は何回も「余計な話をいうけど」「突拍子もないことかもしれないが」といった表現を用いた。いかにも自分の経験や感想などをエッセー風に語っているように見えるが，実は全文はしっかりした構成とテーマを備えているのである。図１に示されているように，この作品は主に四つの話題から構成されている。この四つの話題はどれも「A と B」という二つの対立項の形で作品に現れ，四つの話題とも A のほうは日本の固有伝統を暗喩し，それに対し，B は西洋の近代化思想を指している。表面的には安岡は自分の身のまわりのことや過去の歴史事件などを自由自在に語っているようであるが，内層的にはすべての話題は日本の伝統と近代化との衝突と矛盾に焦点をあてている。さらに，どの話題の中でも，近代化を暗示する B とセメントとの関連性が強調されている。筆者は『セメント時代の思想』の構成とモチーフを次のような図にまとめてみた。



（「 ⟶ 」は『セメント時代の思想』における話題の転換を示している）

図１　『セメント時代の思想』の中の「近代化への批判」にかかわる話題[6)]

この作品の最後には結論としてセメントの寿命が意味深く書かれた。「セメントの建物は大体六十年の寿命だという。遅かれ早かれ，その時期はやってくるのである。」[7]いうまでもなく，「その時期」は一方ではセメントの寿命が終わる日を指しており，もう一方では，日本の近代化の崩壊する時期を暗示していることでもある。

セメントに象徴されるように，日本の歴史，思想，建築，教育，軍隊など日本の社会全体は近代化に影響され，外見だけが西洋のものまねをする日本の近代化はいつか必ず潰れる日が来ると安岡章太郎はセメントを借り，近代化への批判を表明したのが明らかになった。

２．近代化が日本の各家族に与えた影響

日本が近代化しつつある過程は日本の各家族の内部にも大きな影響を与えた。安岡の「志賀直哉私論」という作品からその内容がはっきり読み取れる。

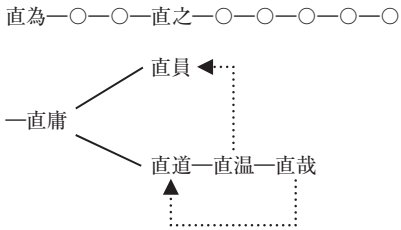
作品のタイトルにあるように，「志賀直哉私論」は安岡が書いた志賀直哉についての作家論と理解しても差し支えない。この作品は主に志賀直哉の代表作「暗夜行路」を研究対象に，志賀直哉の実経験と文学創作を考察しつつ，『暗夜行路』の主題を分析する作品である。

『暗夜行路』は志賀直哉の唯一の長編小説であり，1921年から雑誌「改造」に連載され，その前身は志賀直哉が1912年に書き始めた「時任謙作」である。ところが，３年も書き続けたこの作品はとうとう未完成のまま中断した。その理由について，志賀直哉は「『暗夜行路』の前身『時任謙作』は永年の父との不和を材料としたもので，私情を超越する事の困難が，もしかしたら，書けなかつた原因であつたかもしれない。然し間もなく私は『和解』といふ小説に書いたやうな経緯で，大変気持ちのいい結果で父と和解した。和解してみれば『時任謙作』といふ小説に対する私の気持ちは変化して来た。（中略）長編を

6) 筆者が作成したものである。
7) 安岡章太郎，『セメント時代の思想』，講談社，1972：28-29.

書きたい気はあつても，今までの主題には興味がなくなつて来た。」[8]と自ら述べたことがある。志賀直哉自身の叙述から判断すれば，「時任謙作」と『暗夜行路』のもっとも大きな違いはその主題の変化にあると推測できる。ところが，この志賀直哉自らの発言に対し，安岡はあえて自分の質疑と観点を出した。安岡はこの二つの作品の主題はまさしく同じもので，両方とも父子の対立だと主張しているのである。

「志賀直哉私論」の中で，安岡は志賀家族の歴史について詳しく考察したうえ，志賀直哉と彼の父親との不和をその家族の歴史背景に置き，再検討した。安岡の考察によれば，「志賀直哉の父親との対立の原因の一つが，志賀氏の父直温と祖父直道の対立によることは，すでに述べた通りであり，（中略）それは同時にこの父子の対立を，我が国の『近代』の生んだ都市と農村の対立の面から眺め直させることにもなる。」[9]さらに，安岡は志賀一族の族譜を以下のように要約した。



（点線は自分を実際に育てた，すなわち［父母］に当たる人である）

図２　志賀一家の系譜[10]

8) 志賀直哉，『現代日本文学大系 34 志賀直哉集』，精興社，1968：394．
9) 安岡章太郎，「志賀直哉私論」，『安岡章太郎随筆論 4』，岩波書店，1976：104．
10) 安岡章太郎，「志賀直哉私論」，『安岡章太郎随筆論 4』，岩波書店，1976：105．

志賀直哉は小さい頃ずっと祖父母に育てられてきたので，祖父の直道から大きな影響を与えられた。直哉の父の直温も直哉と似ているような経験を持っている。志賀直哉によれば，「祖父母と父との関係が一人児にしては何所か冷めたいやうに私にも感じられたが，それは父が子供時代，父母よりも，血でいへば伯父伯母に当たる祖父母に育てられたためだつたかも知れないといふ事を後年，私は心附いた。」[11]志賀直哉の祖父である志賀直道は直庸の次男であり，幼い頃から自分より13歳も上の兄一家で育てられた。その息子，すなわち，志賀直哉の父の直温は一人っ子であり，12歳の時から，血で言えば伯父伯母であるが，感情で言えばその祖父母に当たる直員に育てられた。

つまり，成長経験や感情面から見れば，直員と直温，直道と直哉は父子のような関係である。そのため，直温と直道はそれぞれ自分の実祖父母あるいは自分の祖父母にあたる人のそばで育ったと言ってもいい。このような，孫が祖父母に育てられていることは日本の伝統的な農耕社会においては決して珍しいことではなく，それによって生じた親子の間の不和も非常に少なかった。ところが，近代化が進むとともに生じた都市と農村の分化は志賀家族に親子の間の衝突をもたらしたのである。安岡はこの視点から，志賀一家の不和の経緯とその原因を以下のように分析した。

> 都市と農村とが分離し，両者が対立しあうことになるのが，近代社会の始まりだとすると，我が国の徳川末期には明らかにそれに近いものがあったことになる。そして無論，このような社会一般の現象は個人々々のなかにも，多かれ少なかれ反映する。とくに参覲交代の制度によって，江戸詰と国もとの領地で勤めるものとに分かれた武家の場合，一家の中にも都市派と農村派の分離と対立があったものと想像される。[12]

---

11) 志賀直哉，「祖父」，『志賀直哉全集第 9 巻』，岩波書店，1999：107-108．
12) 安岡章太郎，「志賀直哉私論」，『安岡章太郎随筆論 4』，岩波書店，1976：103．

志賀直員は二度ほど江戸詰め[13]をした経験があり，「西洋流砲術皆伝」の免許も持っている人である。それに対し，志賀直道は始終相馬で農業をやる一生を送った。安岡の言葉で言えば，いわゆる「都市型」と「農村型」との摩擦はそのままこの二人の間の摩擦になり，これこそ志賀直哉とその父の間のギャップの源だと考えられる。

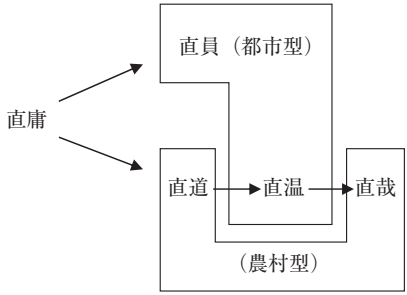


図３　志賀家の家族特徴[14]

図３に示されるように，直員と直温は都市型で，直道と直哉は農村型だという対立がこの家族の内部に存在している。これはあくまでも家族内の親子関係に影響をもたらした。これこそ，安岡章太郎が読み取った「志賀直哉私論」のもっとも大きな主題であろう。

要するに，安岡は日本の「近代化」という斬新な角度から『暗夜行路』を読み直した。その切り口を選ぶ理由と言えば，彼自身の経験と自分の家族の内部構造及び近代化が自分の家に与えた影響と緊密な関係を持っている。安岡章太郎が生きた時代は日本の近代化が進むにつれ，人々の流動性が激しくなり，それまでの血縁関係と地縁関係もだんだん社縁関係に変わっていった時代である。安岡一家もやむを得ず，それまでの大家族の生活パターンからかけ離れ，核家族の家庭形態で生活していかざるを得なくなった。それと同時に，近代家族は

13) 江戸時代，参勤交代により義務づけられ，大名とその家臣が江戸の藩邸に勤務し在府すること。また，その大名や家臣。
14) 筆者が作成したものである。

家庭主義から個人主義に変わり，それまで父が一家の中心だったという家長権威が失われ，安岡一家の夫婦関係と親子関係もそれにより大きな影響を与えられた。同時代ではないが，志賀家族も安岡家族も「近代化」に影響され，それによって家族内には大きな矛盾と衝突が生じたのである。

３．近代化が日本の個々人に与えた影響

安岡文学のキーワードと言えば，その一つは「劣等生」があげられるだろう。また，この「劣等生」は彼の文学を貫くキーワードのみならず，彼の人生のキーワードでもある。勉強を嫌い，成績が悪いから「試験」に嫌悪感を抱いたと普通にそう考えられがちだが，実は安岡の場合は，その深層には彼が選抜試験制度や選抜試験を一特徴としている日本の近代化に対する強い批判が潜まれているのである。その批判意識は，「私説聊斎志異」に端的に現れている。

「私説聊斎志異」は1973年－1974年に『朝日ジャーナル』に連載され，単行本は1975年に発行された。主人公の「私」は長編小説を書くために，一人で京都の南禅寺に籠ることにした。ところが，執筆に行き詰まりを感じ，途方に暮れていた。そのため，「私」は気分転換として近所の人気が少ない博物館に行き，そこでたまたま学生時代からの友人である松浦の娘と出会い，友人の娘に博物館の展示品を紹介してもらった。「私」は展示品のうちの一つである『聊斎志異』という本とその著者の経歴に非常に興味を持った。ここから，小説は「今の自分」「思い出の中の自分」「『聊斎志異』の主人公」「蒲松齢」という四人の人物が生きている時空を自由に行き来し，「私説聊斎志異」の独特の物語構造をなしている。

400編余りの短編小説で構成されている短編小説集『聊斎志異』は，中国の清代の小説家蒲松齢の代表作である。その広范囲な題材，生き生きとした人物像及び巧みなストーリーはこの作品を中国で誰もが知っている作品の一つにした。それにとどまらず，同じ漢字文化圏である日本でも知名度が高い作品となった。国木田独歩，芥川竜之介，太宰治をはじめとするたくさんの日本近代

作家は『聊斎志異』をインスピーレーションか素材にして翻案・改作をした。

「私説聊斎志異」においては，主人公の「私」と『聊斎志異』の著者の蒲松齢との縁のはじまりは，博物館に陳列される科挙受験者の古物である。ところが，安岡章太郎が蒲松齢の『聊斎志異』に注目し始めるのは，決してそう簡単なことではない。安岡は『安岡章太郎集６』の後書きで，こう述べたことがある。

> 私は，すでに何度も述べたように，入学試験に失敗し，落第を繰り返したあげくに，小説を書こうと思い立った。つまり人生の落第生になったことから文学を志したわけで，そのため理想を高くかかげたような主題は，口ごもってウマく言うことができない。そういう私にとって「聊斎志異」の作家蒲松齢が，ほとんど全生涯を科挙の受験に賭け，記録にあらわれているだけでも五十一歳まで落第をつづけたということは，親近感という以上に深い共鳴をおぼえさせられるものであった。[15)]

つまり，『聊斎志異』という作品は安岡を惹きつけたというより，作者蒲松齢の運命は安岡に同病相怜の共鳴を呼び起こしたと言えよう。それゆえに，安岡の『聊斎志異』に対する解釈は，ほかの作品分析と異なり，彼は作者の心境を探求するうえ，蒲松齢と自分との共通点を見出すことにより，自分の結論に導いたのである。

安岡は，「私説聊斎志異」の中で，自分の生きた時代や自分を苦しめつづけた選抜試験制度を直接に論じたのではなく，中国の科挙制度を巧みに風刺することで，日本近代以来の選抜試験制度の弊害を暗喩した。明治維新以後，日本は近代化に拍車をかけていたため，ヨーロッパと同じように標準化された試験で人材を選抜するようになった。日本では旧制高等学校と中等教育の普及に伴い，中学校から高等学校への進学という過程で選抜試験制度が重要な役割を果

---

15) 安岡章太郎，『安岡章太郎集 6』，岩波書店，1986：384．

たすようになった。1920年頃から選抜試験制度は日本に導入され，大学入試が始まった。安岡の回想によると，自分が小学校高学年[16]になった頃，身近な子どもの親たちはすでに自分の子どもの将来の受験のことに関心を持ち始めていた。[17]近代化に伴って生まれた選抜試験制度に対し，安岡は常に一枚の問題用紙あるいは一回だけの試験で人の運命を決めるのはおかしいと批判の態度を抱いていた。また，「頭脳の働きというものは或る程度先天的なものであっても，それは決して一定不変のものではなく，年齢や，周囲の環境のいかんによって，良くなったり悪くなったりするということだ。とくに学校の成績は，結局のところペーパー・テストによってきめられるものだが，テストの点数は必ずしもその問題に対する理解の程度を反映しているものではない。」[18]と，選抜試験の不合理さを指摘した。

日本の大学入試問題には安岡の作品からの抜粋がたびたび出てくる。ところが，命題者の出した問いに対し，安岡本人でさえどこから答えればいいか分からないことが多かった。そのような問題や試験で合格不合格を決めるのは，落ちた者にとって何よりもの悲惨なことだと安岡は語った。一度だけの試験で人の運命を決めるのは，国の教育制度とシステムの欠陥を露にし，また，入試制度はその国の教育方式や理念にも直接影響を与えるのはいうまでもない。教条的で画一化された試験問題があるが故に，当時の日本の学校教育も詰め込み式に変わったのである。安岡が述べたように，「そういう画一的な学校制度の伝統は，じつは文化とか芸術とか個性を育てることには全く適していないのではなかろうか」[19]。画一的で標準化された選抜試験制度は，そもそも個性教育に逆行するものであり，その後の第二次世界大戦の勃発は，さらに学校を道具化へと転落させ，日本の教育体制と試験制度の空洞化を加速させた。つまり，このような教育体制と時代背景によって安岡は選抜試験制度に注目するようになったのである。

16) 1931 年前後。
17) 安岡章太郎，『驢馬の学校』，現代史出版会，1975：42．
18) 安岡章太郎，「私説聊斎志異」，『安岡章太郎集 6』，岩波書店，1986：379．
19) 安岡章太郎，「私説聊斎志異」，『安岡章太郎集 6』，岩波書店，1986：382．

以上述べてきたように，安岡が「私説聊斎志異」を書くきっかけは，『聊斎志異』の著者である蒲松齢との心の共鳴に違いない。この共鳴は，中国と日本という異なる国の，異なる時代の作家たちの，選抜試験制度に対する心からの叫びであり，批判でもある。

しかし，この選考試験に対する安岡章太郎の反発と批判は，結局のところ，彼の劣等感と自身の経歴に起因しているのも事実である。日本の近代以降の選抜試験制度は何の取り柄もないわけではなく，例えば，それは旧制一高時代の夏目漱石，芥川竜之介などの多くの文豪たちをも輩出した。しかし，選抜試験自体は西洋の真似をし，のちに教育そのものが政治と戦争の道具に転落したため，その連続性，目的性及び存在意味を失い，荒唐無稽なものになった。

また，選抜試験制度のもう一つの特徴と言えば，全ての人を同じような人間に育てるところである。選抜試験と呼応した詰め込み式の教育が行われるようになったため，人間としての個性がまったく無視され，個々人の潜在能力の発掘も不可能なことになった。安岡のこの考えは二十世紀80年代からすれば，非常に鋭敏で先見性のあるものである。

安岡章太郎は60代半ば，胆石に心筋梗塞を併発し，半年も入院したことがある。無事に自宅に帰った後，友人の小山鉄郎が安岡の家を訪ね，安岡の長い入院生活のことについて伺った。その時，安岡は自分の学校嫌い，軍隊嫌い，病院嫌いなどの関連性を小山鉄郎に話した。小山氏は当時の談話を以下のように解読した。「病院も軍隊も学校も，人をきれいに整列させる。人を効率的に扱うために，全員を整列させる。それが『近代』というものだね，というような意味だった。病院，軍隊，学校。さらに監獄というものを加えてみれば，明治維新，近代以降のそれらは，効率よく，みな一つの視点から見通せるように，人は整列して並ばされている。」[20]つまるところ，安岡章太郎は，自分が最も反感を持っている三つの場所の共通性は近代化であることを，はじめてこのように直接にはっきりと吐露した。

---

20) 小山鉄郎，「『近代』というものへの眼差し（追悼安岡章太郎）」，『文学界』，2013（4）：145．

近代化というプロセスは日本に経済の急速な発展をもたらしたのは否定できない事実であるが，同時に，このようなトップダウンの近代化は工業社会を瞬く間に日本中を席巻させ，その結果として，病院，軍隊，学校が最も先頭に立ち，その中にいる一人一人は工場の中の一つの「部品」となり，コンクリート建築中の「セメント」になった。病院，軍隊，学校では，すべての物事に対する価値の判断基準は，その物事の最終的な効果に直結しているため，さまざまな弊害を生んだ。軍隊の詰め込み式教育や学校の盲目的な受験教育はその代表的なものである。

「画一的な学校制度の伝統は，じつは文化とか芸術とか個性を育てることには全く適していない」[21]と安岡が指摘した通り，近代化の功利性とその整然とした画一なシステムは必ず人々の個性と創造性の喪失という結果を引き起こすに違いない。

> 刑務所の建物にムダがなく，機能本位にできているということは，刑務所にインターナショナルな雰囲気をもたらしているに違いない。囚人というものは結局，どこの国でも劃一的に単純きわまる生活を強いられており，その点で囚人は兵隊や学生などに似て，しかも中でも最もモダンな抽象的な存在である。[22]

と安岡は「刑務所の美学」というエッセーの中でこう語った。病院も軍隊も学校も，人を効率的に扱うために人をきれいに整列させる組織である。このような高効率，統一と服従を第一理念としている近代化社会を最も代表している抽象的な集団は監獄だろう。そういう意味で考えれば軍隊にいる兵士たちと学校にいる学生たちは囚人とあまり変わらない存在だと安岡は風刺と暗喩の手法によって，日本の近代化が日本の至るところまで及ぼした影響を暴き出した。

---

21) 安岡章太郎，「私説聊斎志異」，『安岡章太郎集 6』，岩波書店，1986：382.
22) 安岡章太郎，「刑務所の美学」，『もぐらの言葉』，講談社，1969：107.

おわりに

日本の近代化は受動的に形成されたもので，日本経済の高速の発展をもたらした一方，巨大な危機をも伴っていた。その危険性とは物質と精神両方がだんだん近代化しつつある過程を経ることなく，一歩でも早く西洋先進国と同じような国になろうという内部意欲と西洋諸国の文明進入という外部からのプレッシャーが作用しあった結果である。

この「近代化」への批判的な眼差しは安岡が晩年書いた長編歴史小説[23]の主題の一つにもなり，彼の文学が絶えず見つめている問題と言っても過言ではない。また，「近代」への関心は彼自身の体験と感受性を原点に，家族や社会へ，さらに歴史や世界へと，目を向けるようになっていった。

安岡章太郎をはじめとする第三の新人の作家たちの文学創作は彼らの文壇登場以来，「思想性や批判性が足りない」と多くの評論家に指摘された。今でも，「第三の新人」と言えば，そのほとんどの文学は市民の日常生活に注目し，思想性と批判性に欠けているというのが一般的な考え方である。本稿で考察してきたように，安岡章太郎の書いた「日常」は一つの手段であり，彼がもっとも表現したいのは何よりも日本社会，各家庭及び一般の人々への注目である。この日常性と批判性の融合こそ安岡の文学の特色あるいは魅力の一つとも言えよう。

参考文献

小山鉄郎，「『近代』というものへの眼差し（追悼安岡章太郎）」，『文学界』，2014（4）.
坂井利夫，『ある「戦後」の遍歴 ― 安岡章太郎を読む』，どうぶつ社，2006.
志賀直哉，『現代日本文学大系 34 志賀直哉集』，精興社，1968.
志賀直哉，「祖父」，『志賀直哉全集第 9 巻』，岩波書店，1999.
新船海三郎，『不同調の音色 ― 安岡章太郎私論』，本の泉社，2013.
松村明，『大辞林（第 4 版）』，三省堂，2019.
村上春樹，『若い読者のための短編小説案内』，文藝春秋，2004.

23) 『果てもない道中記』『流離譚』など。

安岡章太郎,「刑務所の美学」,『もぐらの言葉』, 講談社, 1969.
安岡章太郎,『セメント時代の思想』, 講談社, 1972.
安岡章太郎,『驢馬の学校』, 現代史出版会, 1975.
安岡章太郎,「志賀直哉私論」,『安岡章太郎随筆論 4』, 岩波書店, 1976.
安岡章太郎,『安岡章太郎集 6』, 岩波書店, 1986.
安岡章太郎,『作家の自伝 107 安岡章太郎』, 角川書店, 2000.
安岡章太郎,『戦後文学放浪記』, 岩波書店, 2000.
山崎省一,『安岡章太郎論』, 沖積舎, 2004.
罗荣渠,『现代化新论：世界与中国的现代化进程』, 商务印书馆, 2004.

【附記】本稿は 2022 年度吉林省社会科学基金項目“日本当代文学中的‘阿尔茨海默症’书写研究”（項目編号：2022B111743）による成果の一部である。